井尻B遺跡19

福岡市埋蔵文化財調査報告書第一一〇六集

二〇一一

福岡市教育委員会

いじり

井尻B遺跡19

── 井尻Ｂ遺跡第34次調査報告 ──

福岡市埋蔵文化財調査報告書1106集

2011

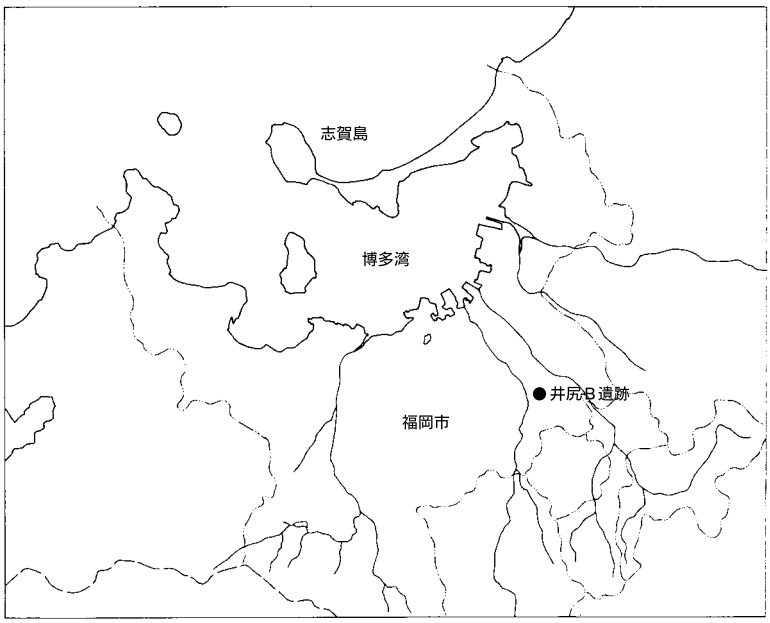
福岡市教育委員会

いじり

井尻B遺跡19

── 井尻Ｂ遺跡第34次調査報告 ──

福岡市埋蔵文化財調査報告書1106集



調査番号　０９２４
遺跡略号　IGB−34

2011

福岡市教育委員会

題字は、福岡市南区在住の書家 珠　荷（辛川容子）氏による

序

二千年の昔から大陸文化の窓口として栄えた福岡市は、二十一世紀のアジアに開かれた都市として、更なる発展を目指しさかんに都市開発が推し進められています。それに伴ってやむなく失われる埋蔵文化財については、将来にわたって記録を保存するための発掘調査をおこなっています。

本書は、南区井尻４丁目815-1、822番で実施した分譲住宅の建設に先立って実施した井尻Ｂ遺跡第３４次調査の発掘調査報告書です。

今回の発掘調査では、甕棺墓や木棺墓、石蓋土壙墓からなる弥生時代の墳墓群のほかに「コ」字状に巡る溝状遺構などが発見されました。殊に、井尻丘陵の南西縁に立地する弥生時代の墳墓群の発見は、井尻丘陵における弥生時代の墳墓群の拡がりを知る上で興味深い発見となりました。

本書は、これらの発掘調査の成果を収録したものです。本書が市民のみなさんに広く活用され、埋蔵文化財保護に対するご理解の一助になるとともに、学術研究に活用していただければ幸いです。

なお、発掘調査から整理報告までの間には、関係者各位をはじめとする多くの方々のご指導とご協力をいただきました。記して心から感謝の意を表する次第であります。

平成23年３月18日

福岡市教育委員会
教育長　山田　裕嗣

れ い げ ん

1．本書は、福岡市教育委員会が分譲型共同住宅の建設に先立って、平成21（2009）年度に、福岡市南区井尻４丁目815－1、822番で緊急発掘調査した井尻Ｂ遺跡第34次調査の発掘調査報告書である。
2．本書に使用した方位は、すべて磁北方位である。
3．本書に掲載した遺構と遺物の実測および製図は、今村ひろ子の協力を得て、小林義彦が作成した。
4．本書に掲載した遺構と遺物の写真は、小林が撮影した。
5．本書の執筆・編集は、小林が行った。
6．本書に係わる遺物と記録類は一括して埋蔵文化財センターに保管している。

調査番号：0924	遺跡略号：IGB－34	分布地図番号：25－0090
調査地籍：福岡市南区井尻４丁目815－１、822		
工事面積：863.27㎡	調査対象面積：432㎡	調査実施面積：485㎡
調査期間：2009年９月16日～10月30日		

本 文 目 次

序
Ⅰ．はじめに …… 1
　1．発掘調査にいたるまで …… 1
　2．発掘調査の組織 …… 1
　3．立地と歴史的環境 …… 3
Ⅱ．調査の記録 …… 6
　1．調査の概要 …… 6
　2．調査の記録 …… 7
　　1）甕棺墓 ST …… 7
　　2）土壙墓 SR …… 9
　　3）土　壙 SK …… 12
　　4）溝遺構 SD …… 14
Ⅲ．おわりに …… 17

挿図目次

Fig. 1　周辺遺跡分布図（1／25,000）…… 2
Fig. 2　井尻Ｂ遺跡位置図（1／5,000）…… 4
Fig. 3　井尻Ｂ遺跡周辺旧地形図（1／20,000）… 5
Fig. 4　井尻Ｂ遺跡第34次調査区現況図（1／500）… 6
Fig. 5　第34次調査区遺構配置図（1／150）…… 7
Fig. 6　1・15号甕棺墓実測図（1／30）…… 8
Fig. 7　1・15号甕棺実測図（1／12）…… 9
Fig. 8　5号木棺墓実測図（1／30）…… 10
Fig. 9　5号木棺墓出土遺物実測図（1／4）…… 10
Fig. 10　6・11号土壙墓実測図（1／30）…… 11
Fig. 11　12号石蓋土壙墓実測図（1／30）…… 11
Fig. 12　17号土壙墓実測図（1／30）…… 12
Fig. 13　2号土壙実測図（1／30）…… 13
Fig. 14　2号土壙出土遺物実測図（1／8）…… 13
Fig. 15　3・4号土壙実測図（1／30）…… 14
Fig. 16　3号土壙出土遺物実測図（1／8）…… 14
Fig. 17　10・13号土壙実測図（1／30）…… 15
Fig. 18　13号土壙出土遺物実測図（1／4）…… 15
Fig. 19　7・8・9・14・16号溝実測図（1／200）… 16
Fig. 20　7・8・9・14・16号溝断面図（1／40）… 16
Fig. 21　9号溝土層断面図（1／40）…… 17
Fig. 22　7・9号溝出土遺物実測図（1／4）…… 17

図版目次

PL1-1)　調査区全景－CG 合成－（北西から）
PL1-2)　調査区南端部全景（北から）
PL2-1)　1号甕棺墓（南から）
PL2-2)　1号甕棺墓（西から）
PL2-3)　1号甕棺墓埋納状況（北から）
PL3-1)　15号甕棺墓（北から）
PL3-2)　15号甕棺墓（西から）
PL3-3)　15号甕棺墓埋納状況（東から）
PL4-1)　5号木棺墓（南から）
PL4-2)　5号木棺墓（東から）
PL4-3)　5号木棺墓床断面（南東から）
PL5-1)　6号土壙墓（南から）
PL5-2)　11号土壙墓（西から）
PL5-3)　12号石蓋土壙墓・17号土壙墓（北から）
PL6-1)　12号石蓋土壙墓（西から）
PL6-2)　12号石蓋土壙墓（南から）
PL6-3)　12号石蓋土壙墓開蓋状況（北から）
PL7-1)　17号土壙墓（東から）
PL7-2)　17号土壙墓断面（南から）
PL7-3)　2号土壙（西から）
PL8-1)　3号土壙（北から）
PL8-2)　3号土壙断面（南から）
PL8-3)　13号土壙（西から）
PL9-1)　調査区西半部全景（北西から）
PL9-2)　9号溝・12号石蓋土壙墓（北西から）
PL9-3)　9号溝東西土層断面（北から）
PL10　出土遺物（縮尺不同）

表目次

Tab. 1　井尻Ｂ遺跡調査一覧表 …… 18

Ⅰ．はじめに

１．発掘調査にいたるまで

井尻Ｂ遺跡は、福岡平野を北流する那珂川に沿って春日市の須玖岡本から井尻・五十川・那珂・比恵へとつづく低丘陵上に立地している。この那珂川以南の地域は、昭和30年代まで農業を基盤とする村落が点在するのどかな田園地帯であった。しかし、高度経済成長期の昭和40年代以降は、郊外の市街化が急速に進み、往年の田園風景は次第に失われつつある。

井尻は、春日市の岡本丘陵から那珂・比恵へと続く低丘陵の中ほどに位置する。この地は、北へ行けば竹下、南は春日、東は板付～月隈、西は曰佐、警弥郷への分岐点にあたり、西鉄大牟田線の井尻駅周辺は、交通の利便性に長じた地として早くから本村を中心に住宅域が拡がっていた。そのため比較的狭い道路が村中を網の目状に延びている。しかし、都市計画道路御供所井尻１号線の整備に伴って周辺の様相は一変し、低中層の共同住宅建設が増加している。

第34次調査区は、春日市から大橋･高宮へと繋がる県道31号線と板付から井尻を経て曰佐方面および春日から牛頸・大宰府へと繋がる県道505号線が交差する井尻六ツ角と通称される交通の要衝に近い井尻丘陵の南西縁に位置している。平成21（2009）年６月に株式会社ランド・コアから井尻４丁目815－1、822における戸建住宅の開発計画が提出された。申請地は、井尻丘陵南西縁の丘陵上に立地し、周辺部における試掘調査等のデータから弥生時代～中世の遺構が残っていることが予測された。そこで開発計画の申請に際して、同年6月21日に試掘調査を実施した。試掘調査では、申請地の西端（トレンチ１）と中央部（トレンチ２）および東端（トレンチ３）に３本の南北方向のトレンチを設定して遺構の存否確認を行い、GL－45cm～－70cm の鳥栖ローム層上で、弥生～古墳時代の竪穴遺構や柱穴等を検出した。この結果を基に遺跡の保存を図る事前協議を行い、遺構密度に濃く、基礎の及ぶ西半部は発掘調査して記録保存を図り、遺構の稀薄な東半部は現状保存を図った。

発掘調査は、平成21年９月16日のパワーショベルによる表土層の除去作業からはじめ、10月30日に排土を埋め戻して原状に復し、すべてを終了した。発掘調査にあたっては、初秋の暑さや東接する狭い通学ゾーンの設定で通勤等に支障が生じるなどしたが、関係者諸氏と発掘作業に従事した方々のご協力で事なきを得、発掘作業は滞りなく終了した。これらの方々の労苦に改めて感謝します。

２．発掘調査の組織

調査主体	福岡市教育委員会	
調査総括	文化財部埋蔵文化財第１課	
	埋蔵文化財第２課長	田中寿夫
	埋蔵文化財第２課調査１係長	米倉秀紀
調査庶務	文化財管理課	井上幸江
調査担当	埋蔵文化財第２課	小林義彦

調査・整理作業

石橋陽子　伊藤美伸　今村ひろ子　浦崎てい子　大瀬良清子　坂梨美紀　知花繁代
塚本よし子　土斐崎孝子　西田文子　馬場イツ子　濱フミコ　播磨博子　日高芳子
福田　操　増田ヒロ子　松下さゆり　松下由希子　森田裕子　諸泉良子　山口慶子
山下美枝子　渡部律子　渡辺律子

Fig. 1　周辺遺跡分布図（1/25,000）

3．立地と歴史的環境

井尻Ｂ遺跡群のある福岡平野は、三方を三郡山系や背振山系からのびる小山塊に囲まれ、北は玄界灘にむかって開口する博多湾に面した沖積平野である。

この福岡平野の中央部を北流して博多湾に注ぐ那珂川と御笠川の間には、標高11～15mの低丘陵が北の博多湾にむかって断続的に長く延びている。この春日丘陵と総称される洪積丘陵は、花崗岩風化礫層を基盤とし、その上層に阿蘇山の噴火による Aso―4の火砕流によって形成された八女粘土層と鳥栖ローム層が堆積する火砕流台地で、台地内には小さな開析谷が幾筋も彎入して複雑な地形をなしている。この春日丘陵は、奴国王の王墓地と推定される岡本遺跡のある須玖岡本から井尻、五十川を経て那珂、比恵へと連なって博多湾の海岸砂丘に至る。これらの丘陵上には、後期旧石器時代から中世にかけての遺跡が連綿と複合的に重なって展開している。殊に、弥生時代から古代にかけては濃密な分布状況を示している。

井尻Ｂ遺跡は、春日丘陵が標高を下げながら那珂・比恵丘陵へと続く標高は11～18mの低平な台地の鞍部に立地している。この井尻Ｂ遺跡については、古くには江戸時代の儒学者青柳種信の著書「筑前國續風土記拾遺」の那珂郡井尻村の条に、「熊野権現の銅矛鋳型」や「大塚」、「古瓦多く出、昔大寺など有りし」などの記述がある。また、大正13年～昭和2年には九州帝国大学の中山平次郎博士が甕棺墓や竪穴のほか瓦の包含層について報告され、寺院基壇の整地層の可能性を指摘され、早くから考古学界には知られていた。この井尻Ｂ遺跡における発掘調査は、昭和56（1981）年の第１次調査に始まり、以来35地点で調査が実施されて、丘陵上における遺構の拡がりや消長が次第に明らかになりつつある。

ここで井尻Ｂ遺跡を概観すると、その初現は後期旧石器時代に始まり、第２次調査や12次調査で細石刃やナイフ形石器、石核が出土している。その後、縄文時代は長きに亘って人跡は途絶える。

弥生時代になると、台地の北西端で弥生時代早期の夜臼式や板付Ⅱ式の土器が散見される。中期には貯蔵穴群や甕棺墓などが拡がっているが、密度的には散漫な分布を示す。後出する遺構からこの期の遺物が大量に出土することを勘案すると多くの遺構は削平されて消失した可能性も考えられる。須玖岡本遺跡を頂点とする奴国全盛の後期になると、竪穴住居や掘立柱建物を中心とする集落遺構が丘陵の全域に濃密に拡がり、一大拠点集落としての様相を示す。中でも丘陵の中央尾根線上に位置する第６次調査や11次調査、17次調査では、小型仿製鏡や銅鏃、銅戈、銅矛、ガラス勾玉などの鋳型や小型ボウ製鏡、小銅鐸、銅鏃などの青銅製品と坩堝や青銅滴付着土器など青銅器やガラス製品を製作に不可欠な遺物が出土している。このことは井尻丘陵に青銅器やガラス製品などを生産する工房的集落があったことを示唆するものである。一方、井尻Ｂ遺跡から南東へ１km の岡本丘陵には、奴国王墓を擁する須玖岡本遺跡があり、奴国の中心地として広く知られている。この須玖岡本遺跡には、奴国王墓や甕棺墓群を主体とする墳丘墓が点在し、その前面に拡がる裾野の沖積地には、青銅器の工房跡である永田遺跡や坂本遺跡、黒田遺跡のほかガラス製品工房跡である五反田遺跡があるほか、南西方にはガラス勾玉鋳型や小型ボウ製鏡が出土した弥永原遺跡があり、その東には後漢鏡を副葬した曰佐遺跡が隣接している。また、井尻Ｂ遺跡から北へ続く丘陵上の那珂遺跡や比恵遺跡でも銅戈の鋳型や取瓶や中子などの鋳造用具が出土している。これらのことから須玖岡本遺跡を中心として北へ延びる井尻～五十川～那珂～比恵へと続く丘陵上には、青銅器やガラス製品を鋳造する有力な拠点的集落が丘陵ごとに展開していたものと推考される。このように青銅器やガラス製品を鋳造する奴国の有力な拠点的集落として丘陵上の各所に展開した集落群も古墳時代初めを境として希薄になる。この期の墓域としては、土壙墓や木棺墓、石蓋土壙墓などが第２次調査や27次調査で検出されている。また、

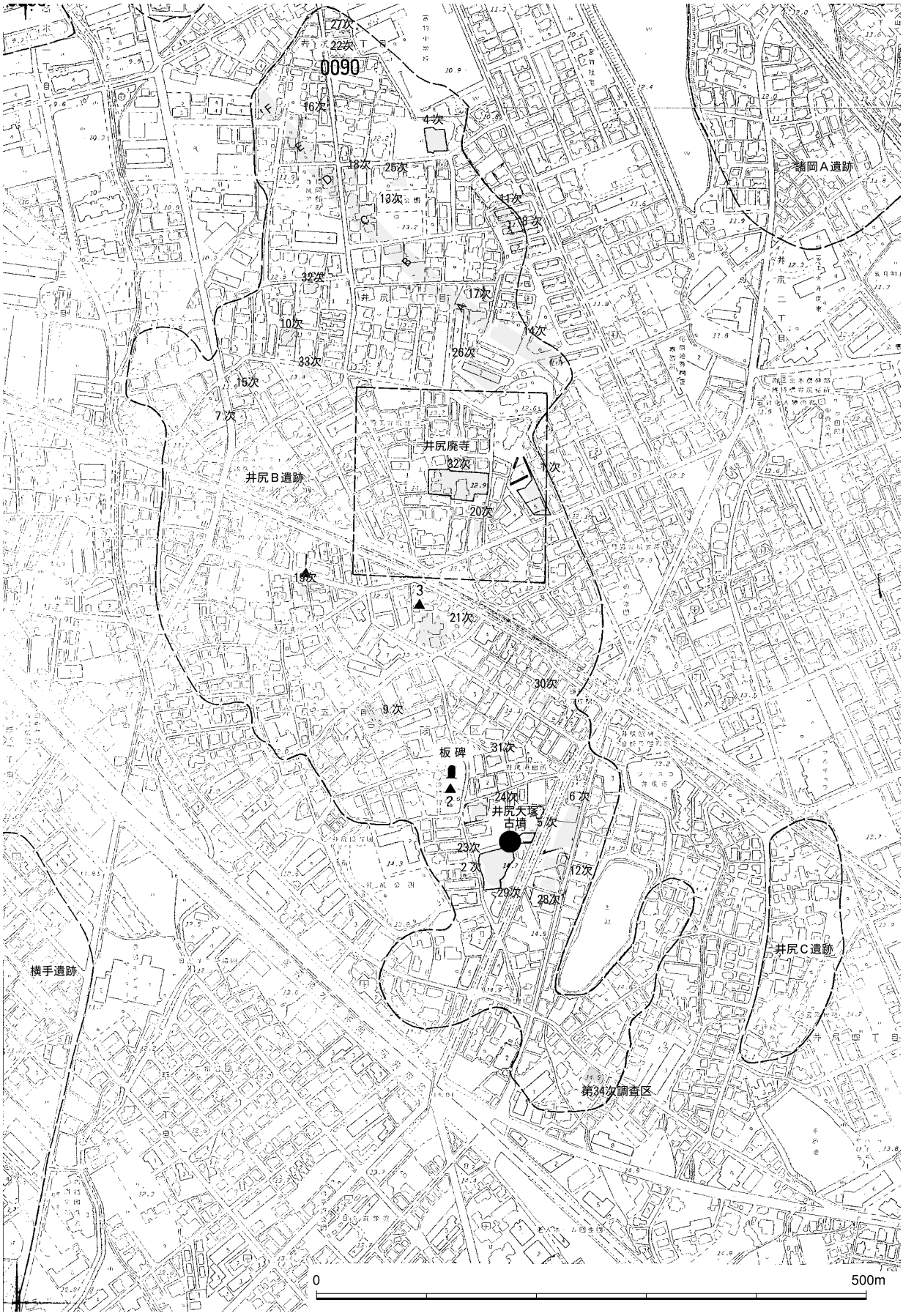


Fig. 2　井尻B遺跡位置図（1/5,000）

これに先行する中期の甕棺墓群が、第16・17・27次調査など丘陵の北側で検出されている。

古墳時代になると、５世紀後半には丘陵南側の第２・５次調査で墳径が25m の前方後円墳の可能性がある円墳（井尻Ｂ１号墳）が造営される。「筑前國續風土記拾遺」に記された「大塚」を想起させる。この間途絶した集落域は、６世紀後半～７世紀に掘立柱建物を中心に再び展開するが、その有り様は疎らである。７世紀後半～８世紀前半には、丘陵中央部の第１・３・17次調査で百済系単弁瓦を初めとする丸瓦や平瓦が、11次調査では「寺」とヘラ描きされた須恵器皿が出土しており、寺院跡（井尻廃寺）の存在が指摘されている。北の那珂、比恵でも老司式の古代瓦を伴う溝などが検出されており、寺院あるいは官衙の存在が想起されている。また、東には太宰府からの官道に沿って高畑廃寺がある。一方、那珂川を挟んだ左岸には銅箸や匙、富寿神寶などが出土した三宅廃寺があり、平野内の拠点には各々に古代寺院が建立されていたものと推考される。これ以降、８世紀後半から古代末、中世の遺構はきわめて希薄で開析谷を隔てた北の五十川遺跡～那珂丘陵に多く見られる。

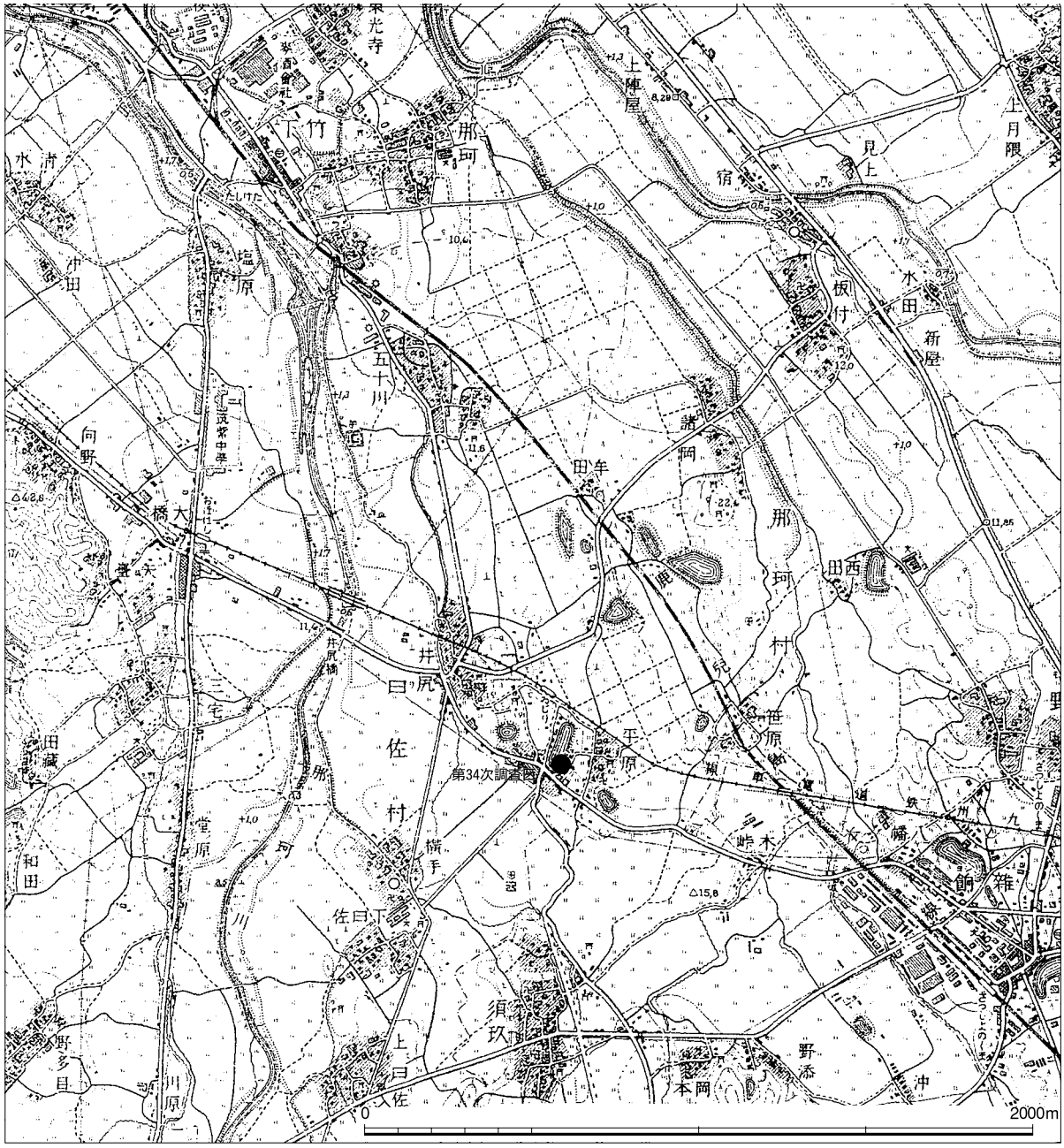


Fig. 3　井尻Ｂ遺跡周辺旧地形図（1/10,000）

Ⅱ．調査の記録

1．調査の概要

井尻Ｂ遺跡は、福岡平野を北流する那珂川の右岸に沿って連なる春日丘陵が、標高を減じながら那珂・比恵へと続く低平な台地上に立地し、第34次調査区は、この南北に長く延びる井尻台地南西部の緩斜面上に位置している。

試掘調査では、申請地に南北方向のトレンチを３本（西から1トレンチ、2トレンチ、3トレンチ）設定して遺構の有無確認を行った。その結果、GL－45～70cm で鳥栖ローム層に掘り込まれた竪穴や溝状の遺構とピットを検出した。密度的には西側の1トレンチに遺構が濃密に拡がっていたが、これに対して中央部から東側の2・3トレンチでは、遺構も疎らであり、かつ検出面も深く基礎が遺構面にまで達しないことから東半部は現状で保存を図り、西側の432㎡を調査の対象として記録保存のための発掘調査を実施した。

発掘調査では、弥生時代中期後半の甕棺墓２基や組合式木棺墓、石蓋土壙墓などの土壙墓５基、土壙５基のほかに溝遺構５条を検出した。このうち溝幅の広い3条の溝は、調査区の中央部に一定の空間域を保ってコ字状に配されている。また、甕棺墓や土壙墓群は、この溝の外縁に沿うように拡がっているが、造墓単位としては小単位である。

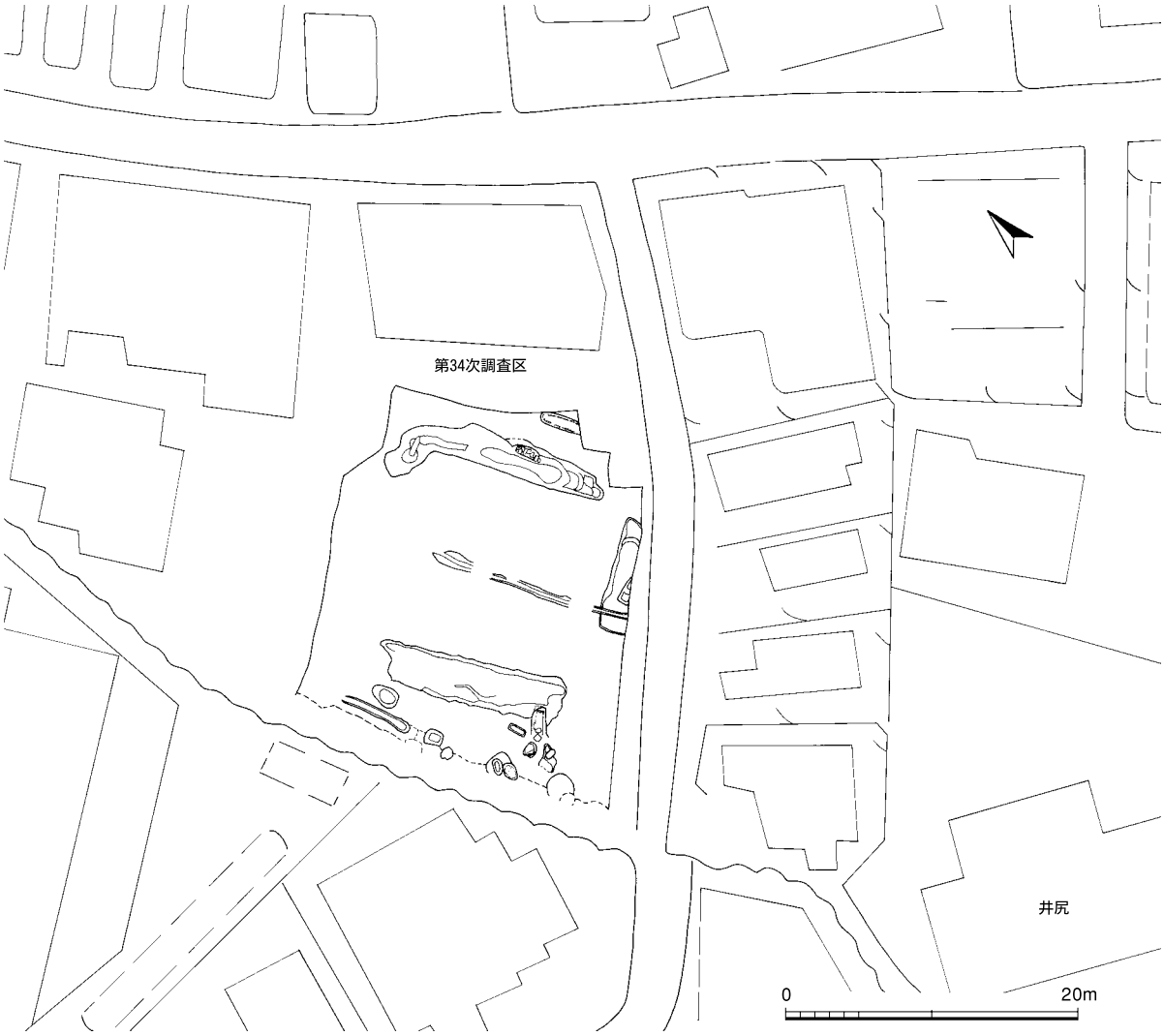


Fig. 4　井尻Ｂ遺跡第34次調査区現況図（1/500）

2．調査の記録

1）甕棺墓　ST

甕棺墓は、調査区の南端で2基を検出した。甕棺墓の可能性のある土壙を含めても数的には少ない。立地的には台地南縁にあり、台地の縁辺に沿って拡がっている可能性も考えられるが、その分布域はきわめて狭小な範囲に限られていたとも考えられる。一方、その縁辺には土壙墓も重なるようにして拡がっており、狭い範囲の中で墓域を形成していたとも考えられる。

1号甕棺墓　ST－01（Fig.6・7　PL.2・10）

1号甕棺墓は、調査区の南西端に位置する単口式の中形墓で、すぐ東には5号木棺墓が、また西に

Fig. 5　第34次調査区遺構配置図（1/150）

は15号甕棺墓が隣接している。墓壙は、はじめに楕円形の竪穴を掘り、その西壁を甕棺の大きさに合わせて20cm ほど斜坑状に掘り拡げて２次墓壙としている。また、口縁部周辺は撹乱坑で消失しているが、２次墓壙は、甕口縁の安定を図るために緩やかな段を有する２段掘りの構造をなしていたものと推測される。甕棺は、この２次墓壙の壙底に棺底を接するようにして約19°の角度で埋置しており、棺底は濃茶褐色土を薄く敷いて棺の安定を図っている。主軸方位はＮ－79°－Ｅにとる。甕棺の上半は撹乱を受けて大半が消失しており、木蓋痕は確認できなかったが、状況的に板材を蓋とした可能性が想定される。

甕（1）は、口径が46.8cm、底径が11cm、器高が68.7cm の中型の甕型土器である。口縁部は、内唇がわずかに跳ね上がる「く」字状をなし、口縁部下には１条のシャープな三角凸帯が巡っている。胴部は、やや膨らみの小さい倒卵形をなす。調整は、口縁部と凸帯部がヨコナデのほかは内外面ともに押圧ナデ後にやや粗いタテハケ目。胎土は良質で、微細～中砂粒を多く含み、焼成は良好。色調は、淡褐色。

15号甕棺墓　ST－15（Fig. 6・7　PL. 3・10）

15号甕棺墓は、調査区の南西端に拡がる墳墓群の中でもっとも西端にある単口式成人墓で、東へ１m の距離には1号甕棺墓が埋置されている。墓壙は、はじめに180cm×140cm ほどの隅丸長方形の竪穴（1次墓壙）を掘り、その南壁に深さが30cm～40cm の竪穴（２次墓壙）をやや斜め方向に掘り込んだ２段掘りの構造をなしている。更に、２次墓壙の壙底は、南にむかって緩やかな斜坑を奥へ掘り込んでいる。甕棺は、この2次墓壙の壙底に口縁部を載せるようにして13°の傾斜をもって埋置し、主軸方位をＮ－14°－Ｗにとる。斜坑と甕棺の間には３～５cm の隙間があり、この隙間にはやや軟質の茶～濃茶褐色土を充填して棺の安定を図っている。また、甕棺は状況的に木蓋で棺を塞いだと考えられるが、明らかな木蓋痕は確認できなかった。

甕（2）は、口径が65cm、底径が11.8cm、器高が95.8cm の大型の甕形土器である。口縁部は肉厚の逆Ｌ字状をなし、内外唇部は平坦に整えている。胴部は砲弾形をなし、口縁部下には１条の三角

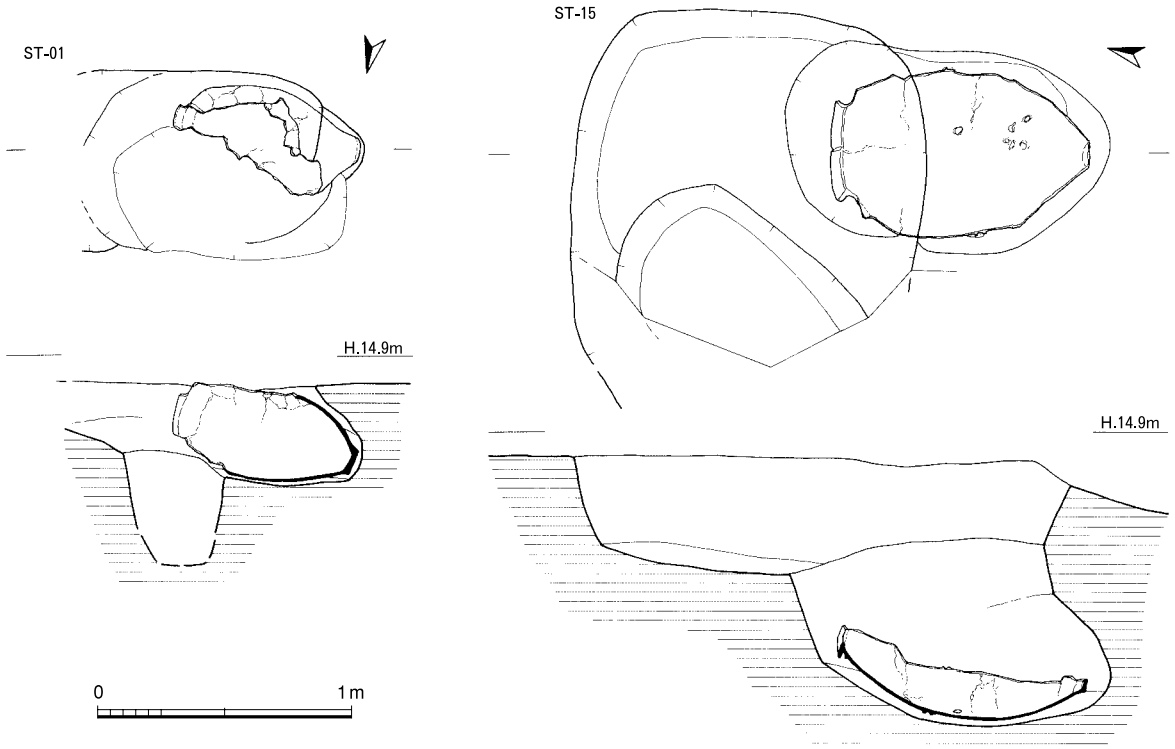


Fig. 6　1・15号甕棺墓実測図（1/30）

凸帯が、最大径部に２条のコ字凸帯が巡っている。このコ字凸帯は、上の凸帯が上方に、下の凸帯は下方に摘み出している。また、コ字凸帯下には、円～長楕円形の円孔が４ヶ所穿孔されている。調整は、口縁部と凸帯部がヨコナデのほかは押圧ナデ調整。胎土はやや粗く、微細～石英粗砂粒と雲母を多く含む。焼成は良好。色調は黄褐色～黄橙色。

２）土壙墓　SR

土壙墓は、すべてで5基を検出したが、構造的には土壙墓と石蓋土壙墓、木棺墓、割竹形木棺墓（？）があり、多種に亘っている。分布的には、甕棺墓と重複する調査区の南西端の一群と９号溝の東縁の一群の二群に分けられるが、狭い範囲に限られた調査区の設定であり、詳細は明らかでないが、状況的に観て墓域の拡がりは小単位で構成されていたものであろう。

５号木棺墓　SR－05（Fig.８・９　PL.４）

５号木棺墓は、調査区の南西端に拡がる4基の墳墓群中でもっとも東に位置し、すぐ西には１号甕棺墓がある。墓壙は、西小口壁が消失しているが、長軸が約220～230cm、短軸が95cm の隅丸長方形プランを呈する。その墓壙壁の5～25cm 内側には、溝幅が15～25cm、深さが12～15cm ほどの筋状の1次溝を直線的に掘り、更にその溝央には、幅が４～８cm の小溝状の２次溝を掘り込んでいる。覆土は、１次溝の暗茶褐色土より濃い黒褐色土で、ここに板材を組み合わせた木棺墓と考えられる。この小溝状の２次溝の外側には、巾が５～９cm、高さが10～12cm ほどの柱状の灰黄褐色粘土が２～４ヶ所あり、板材の固定材とした可能性が考えられる。一方、西小口壁の1次溝は、43×33cm の楕円形プランで東小口壁や側壁と大きく異なる。この１次溝の外側には、40×40cm の方形の板石があり、板材の外壁とした可能性が考えられる。また、板石内面の１次溝の埋土上にも幅が５cm の黒褐色土層が観られ、更にその両端には柱状の灰黄褐色粘土塊があることから、側壁と小口壁の板材を固定したものと考えられる。これらから木棺墓の内法は、長軸が130cm、短軸が44cm に復原される。壙底はフラットで、２～４cm の厚さで黒茶褐色土を敷き固めて棺床を作り、その上面には一面にベンガラを撒いていた。主軸方位はＮ－53.5－Ｅにとる。覆土上層からは弥生壺片や甕片のほかに須恵器甕片が出土したが、床面上からは何も出土しなかった。

３は、上層出土の土師器甕である。口径は17cm。「く」字状の口縁部は、短く直口した後に外反する。胴部は倒卵形を呈する。調整は、口縁部はヨコナデ、胴部外面はやや粗いハケ目、内面はヘラケズリ。胎土には細～粗砂粒を含み、色調は淡赤褐色。

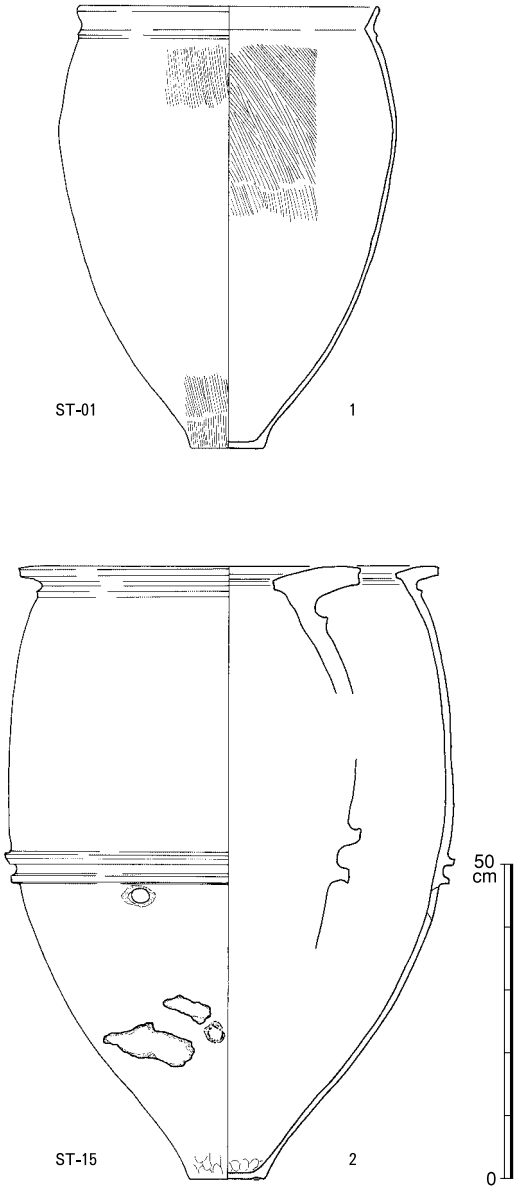


Fig. 7　１・15号甕棺実測図（1/12）

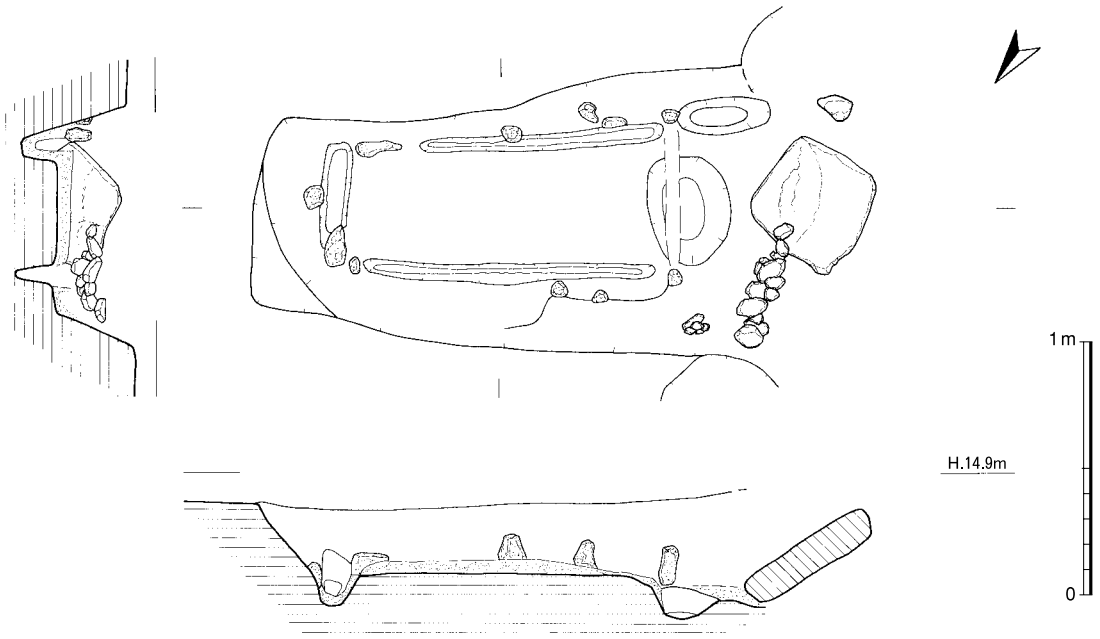


Fig. 8　5号木棺墓実測図（1／30）

6号土壙墓　SR－06（Fig.10　PL.5）

6号土壙墓は、調査区の南東部に位置する小型の土壙墓で、8号溝の埋土上に掘り込まれている。東小口壁が調査区外にあるために全容は明らかではないが、平面形は、短軸が65cmで長軸は120～130cmの長方形プランに復原できようか。主軸方位はN－86°－Eにとる。西小口壁側には33～38cmのフラット面が付き、そこからやや緩やかに傾斜して床面に至るいわゆる2段掘りの構造をなしている。壁高は1段目のフラット面までが25cm、2段目までが28cmで検出面よりの深さは58cm＋αである。床面は、浅い凹レンズ状をなす。覆土は、フラット面までが黒色土、2段目は黄褐色粘土ブロックの混入した黒色土で、弥生甕片と陶器小片がわずかに出土した。

11号土壙墓　SR－11（Fig.10　PL.5）

11号土壙墓は、調査区の南西端に拡がる4基の墳墓群中でもっとも北に位置し、すぐ南には1号甕棺墓が、南東には5号木棺墓がある。平面形は、長軸が125cm、短軸が50cmの隅丸長方形プランを呈し、主軸方位をN－20°－Wにとる。壁面は、側壁がやや急峻に、小口壁はやや緩やかに立ち上がる。壁面は著しく削平されており、壁高は13～18cm。床面は北小口壁側から南小口壁にむかって緩やかに傾斜し、横断面は浅い凹レンズ状をなしている。覆土は、暗褐色～暗茶褐色土の単一層で、遺物は出土しなかった。

12号石蓋土壙墓　SR－12（Fig.11　PL.5・6）

12号石蓋土壙墓は、調査区の東側を南北流する9号溝の東壁埋土上に掘り込まれた石蓋土壙墓で、2m東の台地上には17号土壙墓が主軸線を揃えるように並置して掘り込まれている。墓壙は、9号溝の軟弱な埋土の安定を図るために黄褐色粘土を厚く敷き固め、その粘土層上に掘り込んでいる。平面形は、長軸が165cm、短軸が67cmの長方形プランを呈し、主軸方位をN－22°－Wにとる。深さが65～85cmの壁面は、

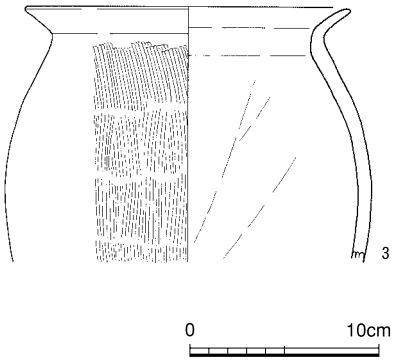


Fig. 9　5号木棺墓出土遺物実測図（1／4）

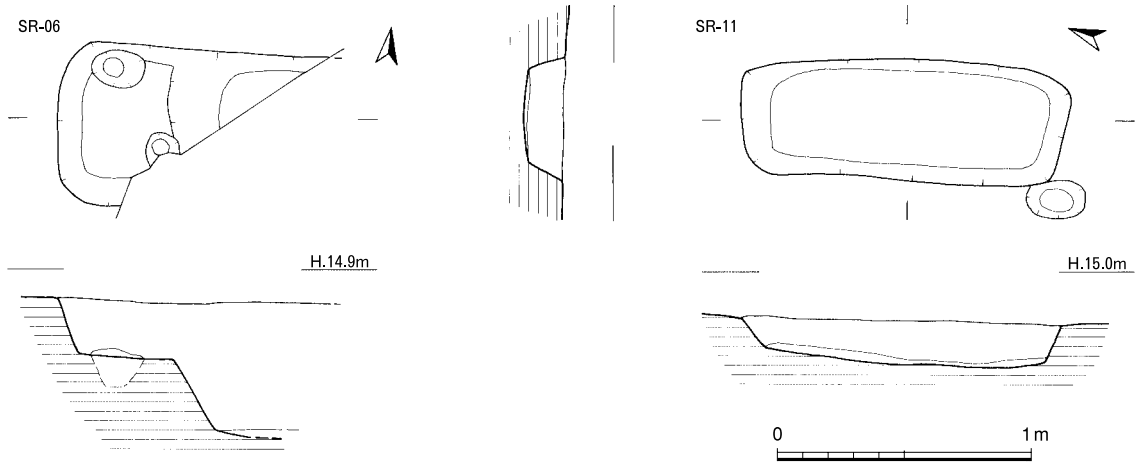


Fig. 10　6・11号土壙墓実測図（1／30）

急峻に立ち上がり、床面は平坦である。この墓壙内には、幅が15～35cm、長さが30～50cm、厚さが15～25cm 大の花崗岩が上下しながら沈んでいた。これは墓壙上に横架していた蓋石材が、9号溝の埋土の沈下によって墓壙内に滑落した結果と考えられる。西小口壁側の床面上の狭小な範囲でベンガラが散見された。また、床面上で鉄錆片が検出され、何らかの鉄製品が副葬されていた可能性がある。

17号土壙墓　SR－17（Fig.12　PL. 5・7）

17号土壙墓は、調査区の東隅にある土壙墓で、西へ2mの距離には12号石蓋土壙墓が並置されて

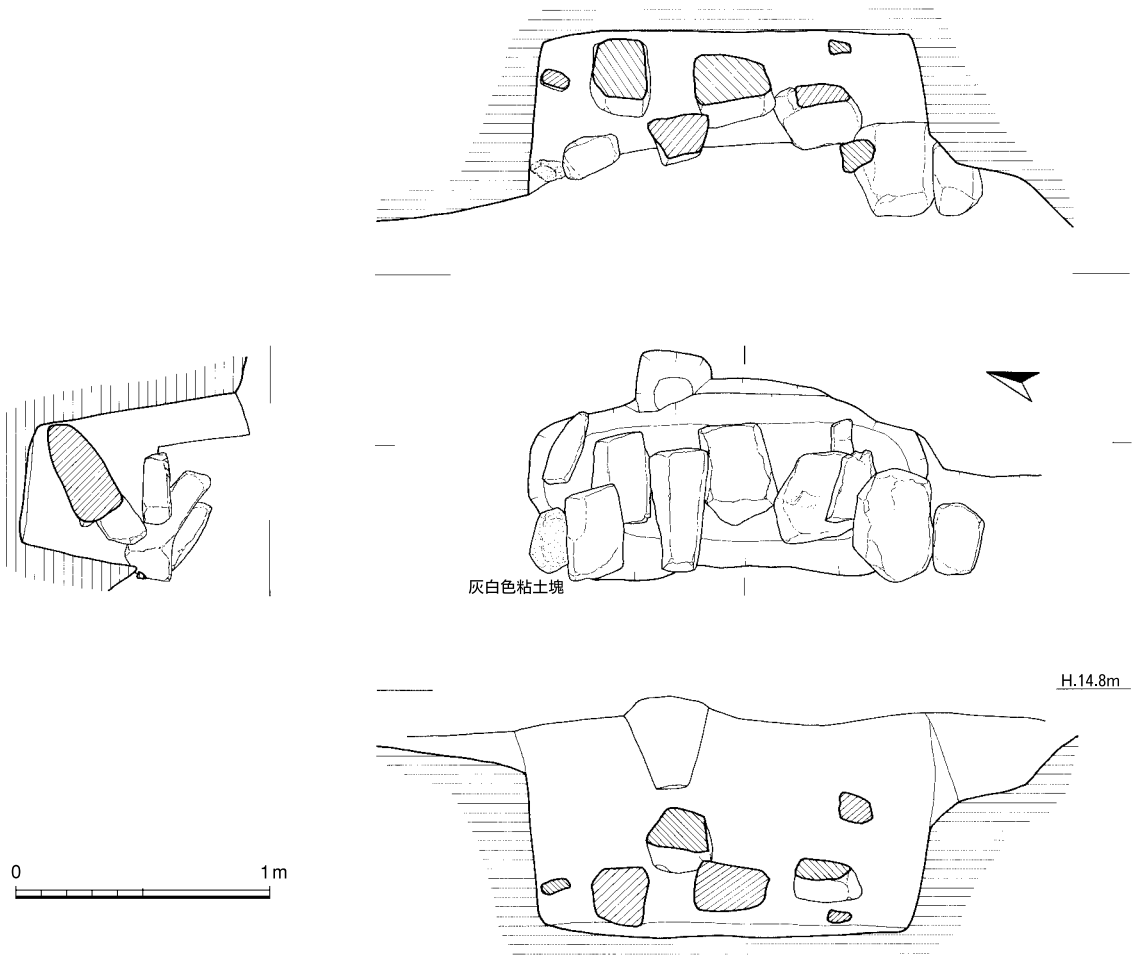


Fig. 11　12号石蓋土壙墓実測図（1／30）

いる。平面形は、長軸は300cm、短軸が99cm の隅丸長方形プランを呈し、主軸方位をN－50°－Wにとる。壁面は緩やかに立ち上がり、壁高は26cm である。床面は、緩やかに傾斜しているが、側壁端より15～20cm の地点から壙央はわずかに変換点をつくって凹レンズ状に浅く窪んでいる。一方、墓壙の側壁から10～15cm 内側、壙底から15cm 上面に幅が７～10cm、厚さが４～６cm の灰白色粘土層が帯状に周っている。断面観察では、この粘土帯から壙央の凹レンズ状の床面にむかって緩やかに弧を描くようして覆土が堆積しており、この粘土帯で上下の棺材を目貼りした割竹形木棺墓の可能性も考えられる。覆土は、黒色土の単一層で、西側壁側の一部に黄褐色粘土粒と小ブロックが混入していた。遺物は弥生甕片が出土した。

３）土　壙　SK

土壙は、すべてで５基を検出した。分布的には、調査区の西端部を南北流する７号溝の西側のみに拡がっており、7号溝以東では検出されていない。ただ、台地西縁の緩斜面上にあたる７号溝の西側は、宅地化の削平によって大きく削平されているが、本来的には台地の縁辺に沿って遺構が拡がっていた可能性が考えられなくはない。平面的には、方～楕円形プランのものに大別されるが、その差異が単なる形状の違いか機能によるものかは明らかではない。

２号土壙　SK－02（Fig.13・14　PL.７・10）

２号土壙は、調査区中央部の西端に位置し、西半～南側は大きく削平されて消失している。すぐ北には10号土壙があり、東へ３ｍの距離には7号溝が南北流している。西壁～南壁側が大きく削平されているが、平面形は、一辺が90～100cm ほどの方形プランになろうか。壁面はやや緩やかに立ち上がり、壁高は38cm である。床面は、緩やかな凹レンズ状をなしているが、東壁にむかって傾斜している。覆土は暗茶褐色土の単一層で、壙底の20cm ほど上層から壷と大型甕のほか、丹塗り壷片が出土した。

４は、壷の胴部である。球形の胴部中位および頸部と胴部の境に１条の三角凸帯が巡る。胴部最大

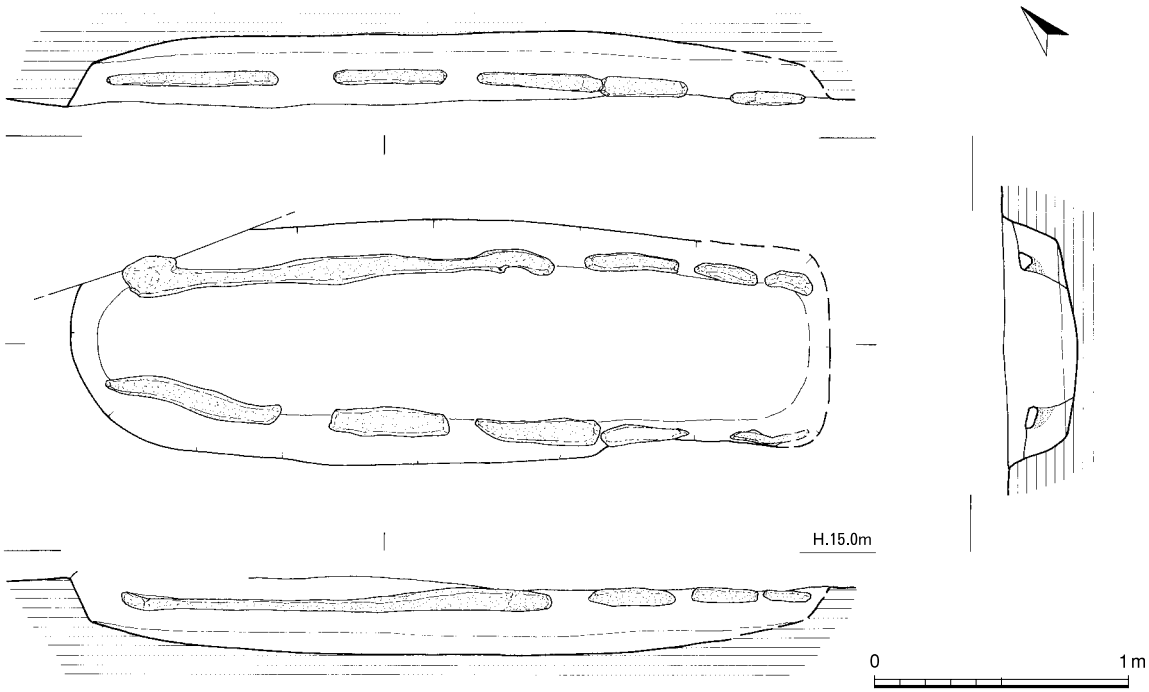


Fig. 12　17号土壙墓実測図（1/30）

径は32cm。調整は、凸帯部がヨコナデ、底部上縁がケズリ状の粗いナデのほかは、やや粗いハケ目。内面は、頸部下が押圧後に粗いハケ目のほかはヘラケズリ。胎土は精良で、若干量の小砂粒を含み、焼成は良好。色調は淡褐色。5は、口径が66.8cm の大型甕である。「く」字状の口縁部は大きく外反し、頸部の屈曲面にシャープな三角凸帯が1条巡っている。胴部は倒卵形をなそう。調整は、口縁部がヨコナデ、外面はナデ後にやや粗いハケ目で、一部に煤様の黒色物の塗布痕がある。胎土は粗く微細砂と石英小～粗砂粒および雲母微細を多く含む。色調は暗赤褐色。

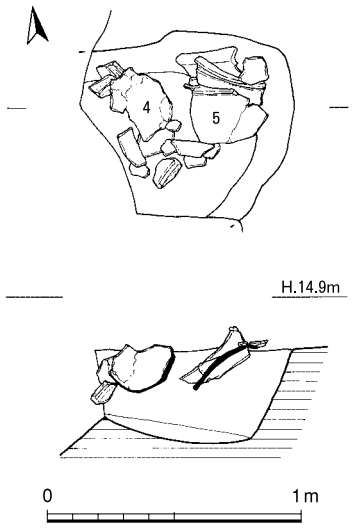


Fig. 13　2号土壙実測図（1/30）

3号土壙　SK－03（Fig.15・16　PL. 8 ・10）

3号土壙は、調査区の南端にある不整形な土壙で、北東隅壁は、4号土壙と重複している。すぐ北には1号甕棺墓と5号木棺墓が並んで位置している。平面形は、105～120cm の不整な方形プランを呈し、壙央より西壁には深さが20～30cm の緩やかな斜抗を掘り込んだいわゆる2段掘りの構造をしている。覆土は、暗茶～濃茶褐色土の単一層で、上段の竪穴の上層からは丹塗りの壷や樽形土器が掻き乱された状況でまとまって出土した。はじめに竪穴を掘り、その後に斜坑を掘る構造的な特徴や出土土器から甕棺墓の可能性も想起される。

6は、口径が17.4cm の小型壷である。頸部は直口気味に緩やかに外反し、口縁部は水平に摘み出して端部を丸く納めている。頸部から胴部への屈曲部には1条の三角凸帯を貼り巡らせている。調整は、外面がヨコナデ、内面は指頭押圧後にヨコナデ～ナデ。胎土は精良で、若干の小砂粒を含み、焼成は良好。色調は明褐色。7は、丹塗りの壷で、球形の胴部上半には3条の、頸部と胴部の境には1条のM字凸帯を貼り巡らせている。胴部の最大径は50cm である。外面は凸帯部がヨコナデのほかは研磨状の丁寧なナデ、内面は押圧ナデ。胎土は精良で、小砂粒を比較的多く含み、焼成は良好。色調は外面が濃赤褐色、内面は赤褐色。8は、口径が24.2cm の丹塗りの樽形甕である。緩やかに内傾する口縁部は端部が肥厚し、口縁部下には1条のコ字凸帯が巡っている。調整は、内面が押圧ナデ、外面は丹塗り後にヨコあるいはタテ方向の研磨。胎土は精良で、焼成は良好。色調は、外面がベンガラの濃赤褐色、外面は淡明褐色。

4号土壙　SK－04（Fig.15）

4号土壙は、調査区の南端に位置する小型の土壙で、3号土壙と重複し、それよりも新しい。平面形は、長軸が75cm、短軸が48cm の長方形プランを呈し、主軸方位をN－87°－Eにとる。壁面はやや急峻に立ち上がり、壁高は35～55cm である。壙底は、西小口から東小口にむかって緩やかに傾斜し、断面形は逆台形をなしている。覆土は、黄褐色ローム

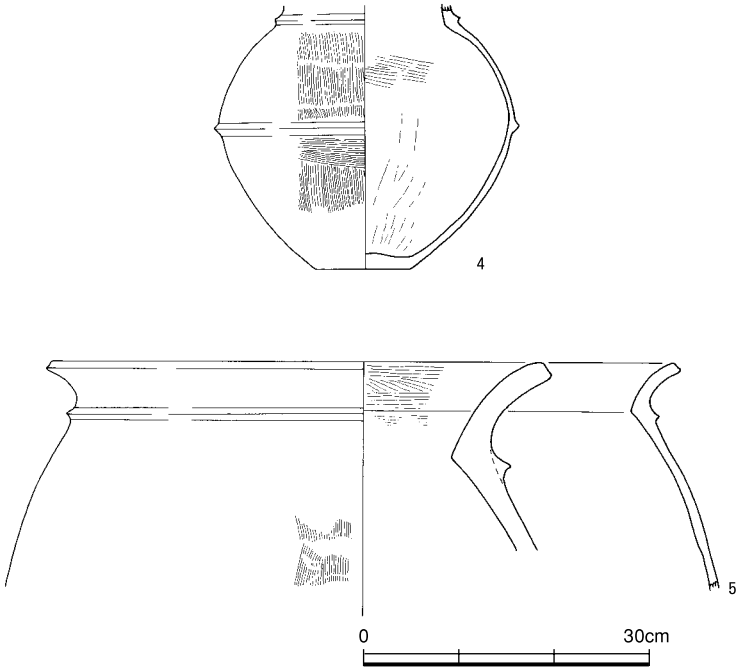


Fig. 14　2号土壙出土遺物実測図（1/8）

粒を含んだ暗褐色土の単一層で、丹塗り壺片が出土した。

10号土壙　SK－10（Fig.17）

10号土壙は、調査区の中央部西端にあり、すぐ南には2号土壙が位置している。平面形は、長軸が130cm、短軸が110cm の隅丸方形プランを呈する。壁面は緩やかに立ち上がり、壁高は33cm。床面はほぼフラットで、断面形は逆台形をなす。検出面に40～50cm 大の花崗岩の板石が水平に置かれていた。

13号土壙　SK－13

（Fig.　17・18　PL.8・10）

13号土壙は、調査区の北西端に位置する大型の土壙で、すぐ東には7号溝、西には16号溝がある。平面形は、長軸が190cm、短軸が100～137cm の不整な楕円形プランを呈する。壁面は緩やかに立ち上がり、削平を受けて壁高は8～13cm と浅い。南側壁際から横置された二重口縁壺が出土した。覆土は、暗茶褐色土の単一層。

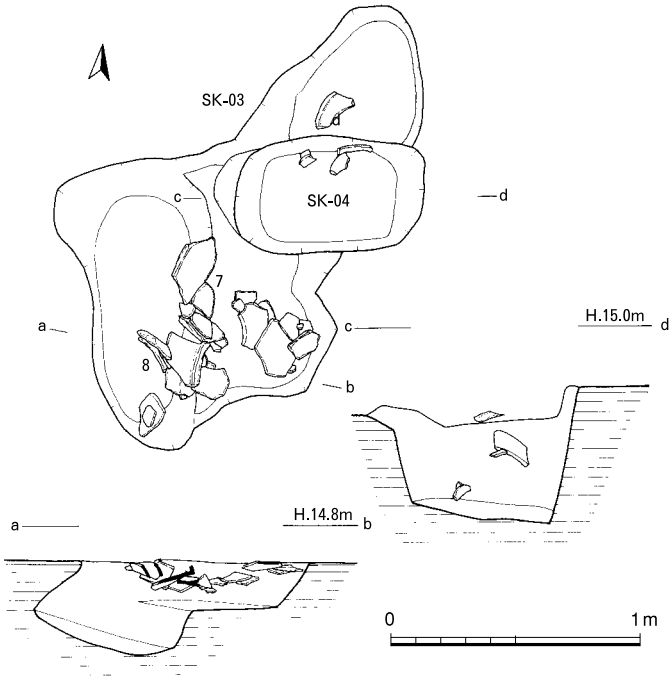


Fig. 15　3・4号土壙実測図（1/30）

9は、口径が19.2cm、底径が9cm、器高が36.5cm の二重口縁壺である。口縁部は、大きく外反した頸部から鋭く内傾して短部を小さく摘み出すようにして平坦に整えている。胴部は、やや肩の張った倒卵形を呈し、頸部から胴部への屈曲点と最大頸部に各1条の三角凸帯を巡らせている。調整は口縁部や凸帯部がヨコナデのほかは押圧ナデ後にハケ目。胎土は、やや粗く細～中・粗砂粒を多く含むほか雲母微細と赤褐色粒を含む。色調は、内面が淡黄灰色～淡黄褐色。外面はややくすんだ淡黄褐色。

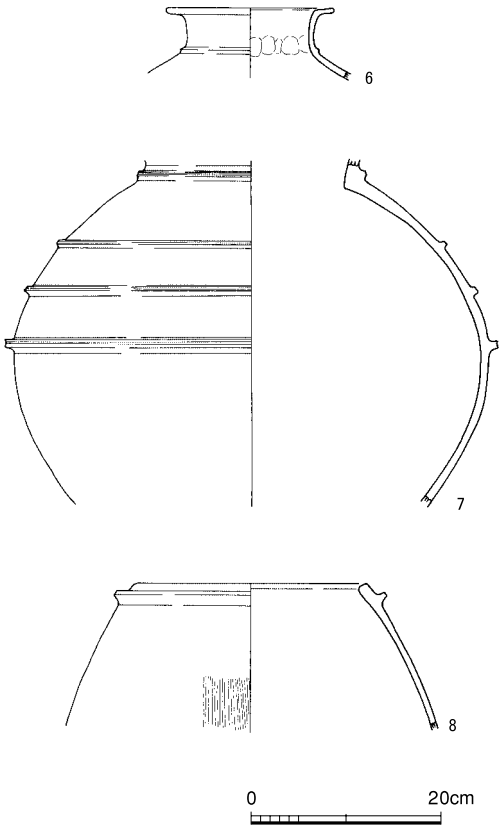


Fig. 16　3号土壙出土遺物実測図（1/8）

4）溝遺構　SD

溝は、すべてで5条を検出した。規模的には、溝幅の狭い溝（SD－14・16）と広い溝（SD－07～09）に区分できる。このうち溝幅の広い7～9号溝は、覆土や規模から強い類似性が窺がわれるが、深さや断面形に差異がある。ただし、俯瞰的には矩形をなしており、何らかの有機的な繋がりがあった可能性も考えられる。

7号溝　SD－07（Fig.19・20・22　PL.9・10）

7号溝は、調査区の西部を南北流する幅広の溝で、南西隅壁は5号木棺墓と重複している。溝幅は250～290c

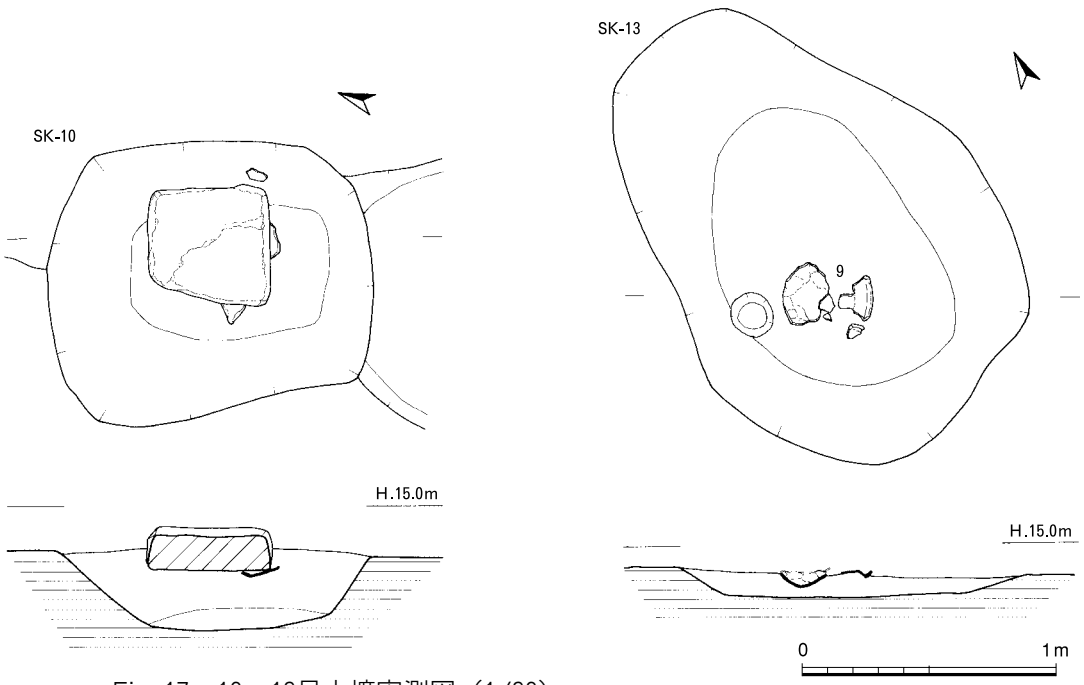


Fig. 17　10・13号土壙実測図（1/30）

m、深さは20〜37cm で全長は12.9m である。断面形は浅い逆台形で溝底は緩やかな凹レンズ状をなしている。西壁側には幅が60cm 余のフラットな面がある。覆土は黒褐色〜黒色土の単一層で、弥生土器の壷や甕•高坏のほかに大型甕片や土師器甕片が少量出土した。

10は、口径が17.8cm の袋状口縁壷である。口縁部は小さく膨らみながら内傾し、頸部との境には緩やかな稜を作る。調整は、口縁部がヨコナデ、頸部は内外面ともに粗いハケ目。胎土は良質で小砂粒を若干含み、色調は明褐色。11は、口径が17.4cm の土師器甕。口縁部は「く」字状に外反し、胴部は球形をなす。調整は、口縁部がヨコナデ、胴部外面はヨコ〜ナナメのハケ目、内面はヘラケズリ。胎土は良質で小砂粒を若干含む。色調は淡明褐色。12は、砂岩質の砥石。中央部ほど磨痕が明瞭で、横断面は短冊状をなしている。砥面は、表裏面と両側面の4面。13は、砂岩質の敲石。表裏2面に3〜4cm 大の敲打痕が残る。

8 号溝　SD－08（Fig.19・20）

8 号溝は、調査区の南端を東西流する幅広の溝で、6 号土壙墓や12号溝と重複し、もっとも古い。溝の長さは7.9m、深さは10〜22cm で溝幅は2.3〜2.4m ほどに復原できようか。溝底は、浅い凹レンズ状をなし、断面形は低い逆台形をなす。覆土は、黒褐色土の単一層で弥生時代の丹塗り高坏片や甕片がわずかに出土した。

9 号溝　SD－0 9（Fig.19〜22　PL.9・10）

9 号溝は、調査区の東端を南北流する幅広の溝で、東壁埋土上には12号石蓋土壙墓が掘り込まれ、その

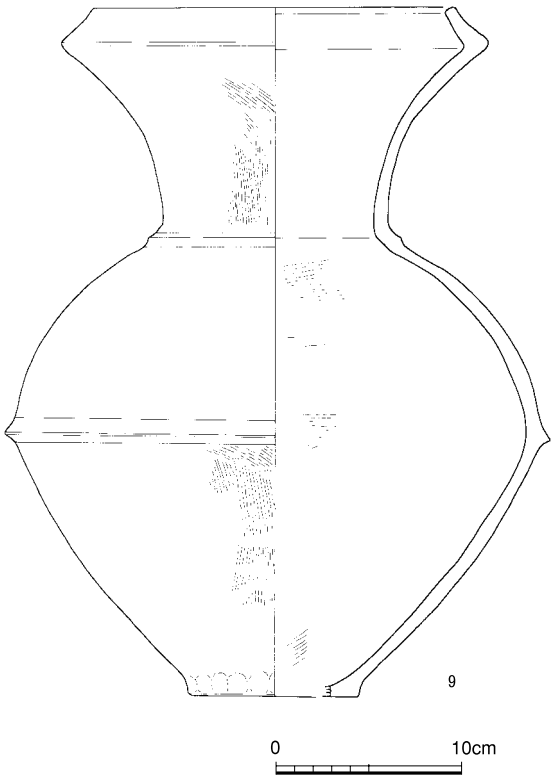


Fig. 18　13号土壙出土遺物実測図（1/4）

すぐ東には17号土壙墓が並置されている。溝幅は1.75〜2.35m、長さは14.3mで、北端は約25°の角度で西へ屈曲して短く延びている。壁面は緩やかに立ち上がり、深さは86〜106cm。溝底はほぼ平坦で逆台形の断面形をなすが、西壁側には2段掘状をなす箇所もある。また、溝の中央部がもっとも深く、南北側の壁面には2〜3段の階段状のステップを作って溝央に至るような構造をしており、平面的に矩形をなす7・8号溝とは、覆土的には類似しているが構造的には大きく異なる。覆土は、黒茶〜黒色土で、壷や甕・高坏片などが出土した。

14は、口縁部が小さく膨らんで内傾する袋状口縁壷である。調整は、内外面ともにハケ目。胎土は良質で、小砂粒を含む。色調は明褐色。15は、底径が3〜3.5cmの小型壷である。手捏ねの胴部は肩の張った偏球形で、内面は強い指頭押圧ナデ、外面はナデ調整。胎土はやや粗く、石英小〜中砂粒および雲母微細を含む。淡黄褐色。16は、口径が11.6cm、器高が7cmの丸底壷である。口縁部は短く「く」字状に外反し、胴部は半球形をなす。胎土は精良で微細砂と雲母微細を含み、口縁部はヨコナデ、胴部はナデ。17は、口径が10cmの小型丸底壷である。口縁部はストレートに外反する。胴部は球形を呈し、内面は指頭押圧ナデ、外面はハケ目後にナデ。胎土は精良で若干の微細砂を含む。色調は明赤褐色。18は、高坏の坏部で口径は10.5cm。坏部内面には粗い研磨を放射状に施し、丹彩痕がわずかに残っている。胎土は精緻で、微細砂と雲母微細粒をわずかに含み、明橙色。

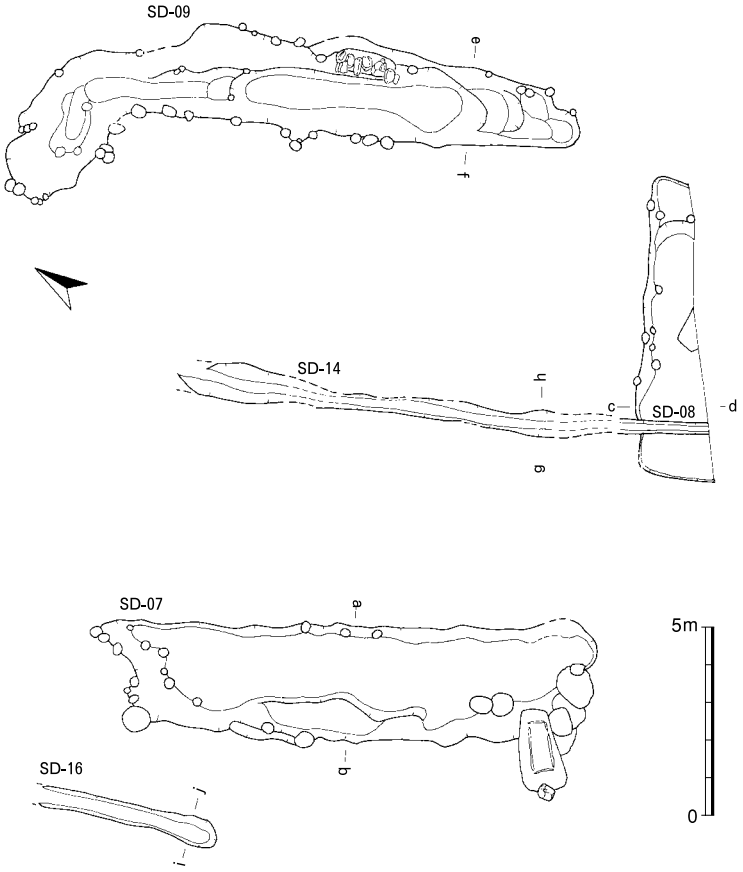


Fig. 19　7・8・9・14・16号溝実測図（1/200）

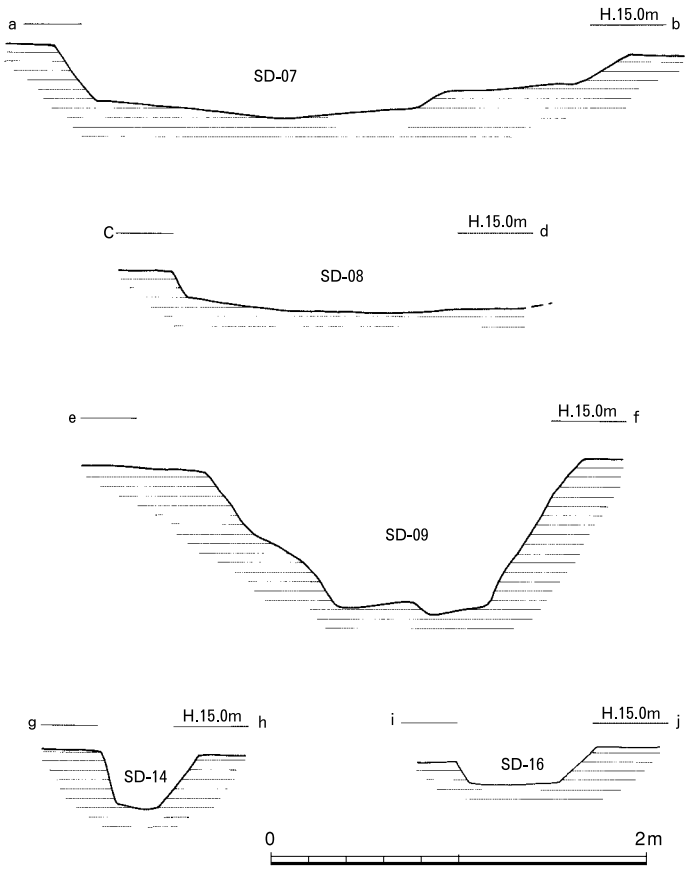


Fig. 20　7・8・9・14・16号溝断面図（1/40）

14号溝　SD－14（Fig.19・20）

14号溝は、調査区の中央部を南北流する溝で、南端部は８号溝の埋土上から掘り込まれている。溝幅は、30～55cm で北端部は85～105cm と幅広くなる。長さは14.5m。壁高は15～35cm。断面形は逆台形をなし、溝底の標高は南北端が14.50～14.30m、中央付近が14.62～14.66m である。覆土は暗褐色～濃茶褐色土。

16号溝　SD－16（Fig.19・20）

16号溝は、調査区の北西縁を南西から北西へ延びる短い溝で、北端は撹乱を受けて消失している。溝幅は45～55cm、長さは4.82m、深さは5～15cm ときわめて浅い。すぐ東には13号土壙がある。覆土は濃茶褐色土で、大型甕片がわずかに出土した。

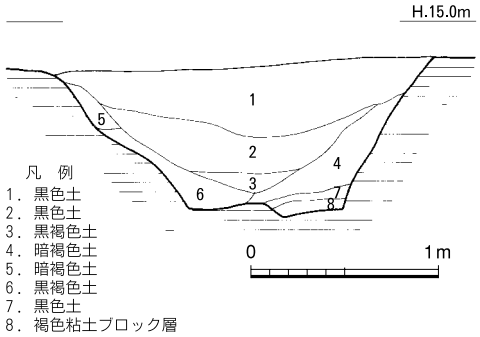


Fig. 21　９号溝土層断面図（1/40）

Ⅲ．おわりに

第34次調査区は、南北に長い井尻Ｂ遺跡南西縁の開析谷に面した緩斜面上に立地し、弥生時代中期後半～後期の甕棺墓や土壙墓からなる墳墓域と矩形に配された幅の広い大溝を検出した。このうち

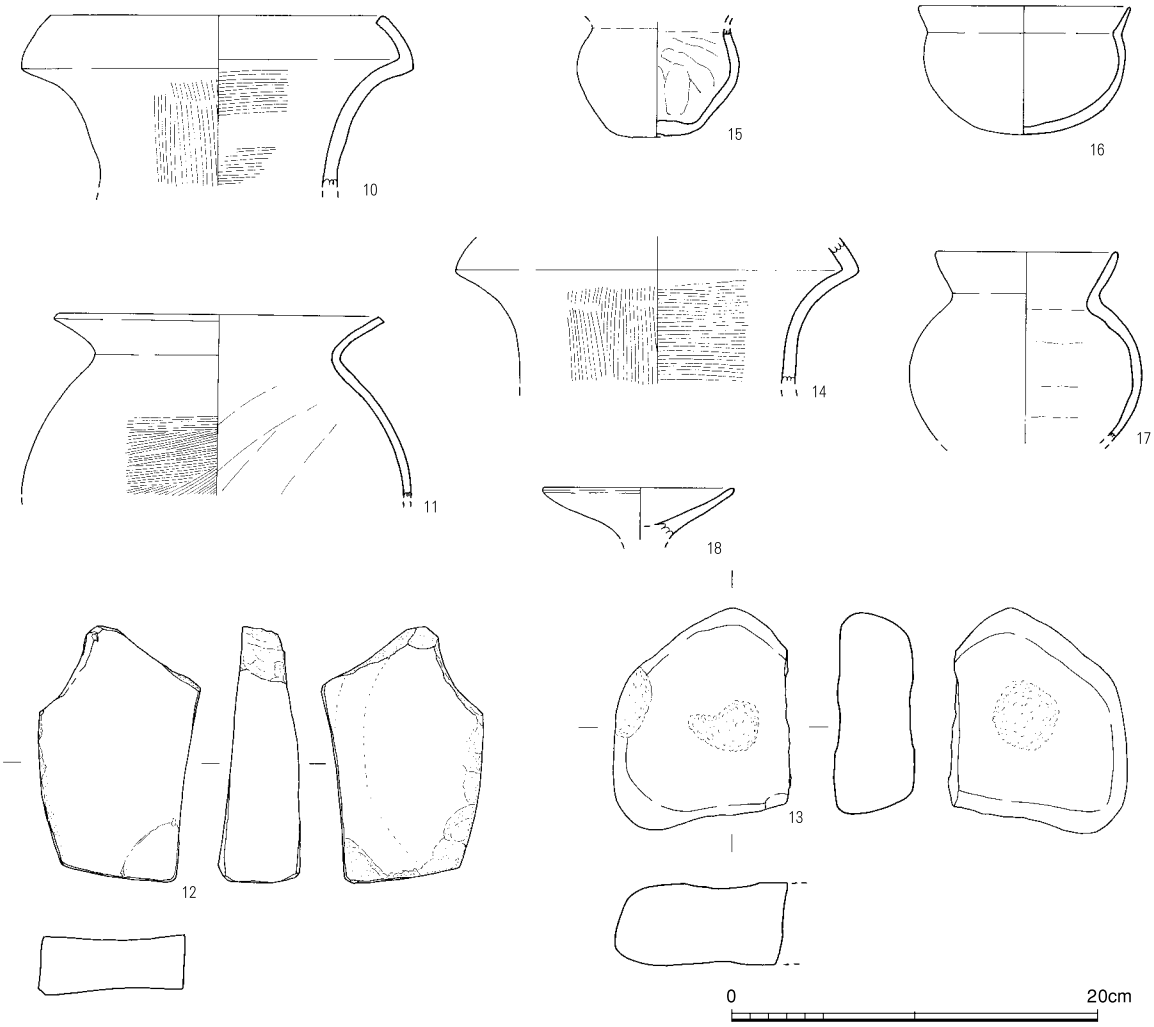


Fig. 22　７・９号溝出土遺物実測図（1/4）

甕棺墓や土壙墓からなる墳墓群の検出は、井尻台地の南西部域にも墓域が拡がっていることが明らかになったが、規模的には現状からして小規模な単位になろうか。少ないながらも墓域は、概ね2時期に亘って営まれる。はじめに調査区の南縁で甕棺墓が造墓され、続いて土壙墓群が展開する。ただこの土壙墓群は、土壙墓や木棺墓、石蓋土壙墓など構造的には多岐に亘る。墓域的には、甕棺墓群と墓域を共にする南縁の一群とやや離れた東南縁に墓域を作る一群に分けられる。これが域内における小単位集団の違いに因るものか否かは即断し難く、周辺域の調査例の増加を待って再検討することが必要である。次に、3条（7～9号溝）の幅広い溝が調査区の中央部を占めるようにして立地している。この各溝の隅部は連続せず、ブリッジ状に開いた矩形をなしている。東側の9号溝は、北端が西へ短く延びており、その延長線上の西側は撹乱を受けて溝の存否は明らかではないが、俯瞰的には方形に区画された空域をなしている。溝幅や覆土などは強い類似性が窺われるが、断面的には7・8号溝が浅いのに対して、9号溝は3～4倍ほど深く、その両端部は溝央にむかって階段状に下がり、構造的に大きく異なると同時に溝底の最深レヴェルも7号溝が14.50m、8号溝が14.55m、9号溝が13.80mと台地側が深い。この矩形の内法は、東西が12m、南北が14mと方形周溝墓的遺構を想定した場合、規模的にはやや大きい感がある。また、内部空間域には主体部と思しき遺構はなく、墳墓としての可能性はなくはないが、可能性としてはきわめて低いと考えざるを得ない。いずれにしても今後の調査例の増加を待って井尻台地における遺跡群の消長を検討することが望まれる。

遺　跡　名	調査番号	調査年	所　在　地	調査面積（㎡）	報告書	遺跡の概要	主な遺物
第1次調査	8124	1981	井尻1丁目111-1外	600	111	土壙、溝、水溜状遺構	丸・平瓦
第2次調査	8610	1986	井尻5丁目175-1	930	175	旧石器、弥生～古墳；掘立柱建物、土壙墓、古墳	細石刃、石核、ナイフ形石器、円筒埴輪、家形埴輪、ガラス小玉
第3次調査	9201	1992	井尻1丁目293-1・2外	1,060	411	弥生～古墳；住居跡、井戸跡　古代；住居跡、溝	碧玉勾玉、鉄斧、百済系単弁軒丸瓦
第4次調査	9335	1993	井尻1丁目747-1	390	412	弥生後期～古墳前期；住居跡、掘立柱建物、井戸跡、土壙	
第5次調査	9408	1994	井尻5丁目171-3	130	441	古墳；円墳	円筒埴輪、家形埴輪、ガラス小玉、鉄剣、鉄刀
第6次調査	9501	1995	井尻4丁目170、171-1	800	529	弥生後期～古墳初頭：住居跡、掘立柱建物、井戸跡、土壙	小型ボウ製鏡、銅鏃鋳型、ガラス小玉
第7次調査	9520	1995	井尻1丁目363-2外	69	年報 Vol.10		
第8次調査	9667	1997	井尻1丁目13番地内	113	571	弥生～古代の遺物包含層	
第9次調査	9745	1997	井尻5丁目6-33	132	678	弥生後期；住居跡	
第10次調査	9758	1997	井尻1丁目27-13	153	678	弥生～古墳；溝　古代；掘立柱建物	百済系単弁軒丸瓦
第11次調査	9809	1998	井尻1丁目13番地内	690	644	弥生中期～古墳初頭；井戸跡、土壙	銅矛鋳型、銅鏃、鐸形土製品
第12次調査	9865	1999	井尻4丁目170-1外	125	645	弥生後期～古墳初頭：住居跡、掘立柱建物、	細石刃核
第13次調査	9953	1999	井尻1丁目755-8	60	年報 Vol.14	弥生後期；住居跡　中世；溝	
第14次調査	9958	1999	井尻1丁目13番地内	952	736	弥生；掘立柱建物　古墳；井戸跡	銅鏃鋳型
第15次調査	9965	2000	井尻1丁目362-3	36	年報 Vol.14	中世；溝	
第16次調査	4	2000	井尻1丁目729-1	132	721	弥生中期；甕棺墓、土壙墓、土壙	
第17次調査	0027・0090	2000	井尻1丁目地内	3,657	787・834・918	弥生後期～古墳前期；住居跡、掘立柱建物、土壙、井戸跡、甕棺墓	小型仿製鏡、小銅鐸、ガラス勾玉・銅弋鋳型
第18次調査	28	2000	井尻1丁目757-3	186			
第19次調査	43	2000	井尻5丁目12-32	133			
第20次調査	116	2001	井尻1丁目283-1	69			
第21次調査	126	2001	井尻5丁目9-2外	366	788	弥生；甕棺墓、住居跡、土壙、溝　古代；溝	
第22次調査	133	2001	井尻1丁目735-5	141	923	弥生、奈良、中～近世；掘立柱建物、土壙、溝	
第23次調査	474	2004	井尻5丁目163-3	22	年報 Vol.19		
第24次調査	489	2004	井尻5丁目163-1外	66	年報 Vol.19	弥生；柱穴　古代；土壙、溝	
第25次調査	613	2006	井尻1丁目754-2外	80			
第26次調査	629	2006	井尻1丁目87番1	614	973	中世；水田跡	
第27次調査	641	2006	井尻1丁目763-3外	133	整理中	弥生後期；掘立柱建物、土壙、甕棺墓、土壙墓	朝鮮系無文土器、文字瓦、青銅器鋳型中子
第28次調査	658	2006	井尻4丁目170-12	241		弥生末～古墳初頭；住居跡、溝	家形埴輪
第29次調査	668	2006	井尻5丁目175-1	87			
第30次調査	734	2007	井尻5丁目143-17	129		弥生後期～古墳初頭；住居跡、掘立柱建物、落とし穴	
第31次調査	765	2007	井尻5丁目160-6	103.5		弥生時代中期～後期;	
第32次調査	849	2008	井尻1丁目712番7	98.2		弥生時代中期～後期；竪穴住居、掘立柱建物、土壙、井戸	弥生土器、土師器、須恵器、瓦、石器、ガラス、鉄器
第33次調査	859	2008	井尻1丁目305番16	37.0		弥生時代、近世；溝、柱穴	土器、陶磁器
第34次調査	924	2009	井尻4丁目815-1、822	485.0	1106	弥生時代中期～後期；甕棺墓、土壙墓、土壙、溝	弥生土器・土師器
第35次調査	938	2009	井尻1丁目764番2	61.0		弥生時代中期～後期、古代；竪穴住居、溝	土器

Tab. 1　井尻Ｂ遺跡調査一覧表

1）調査区全景－ＣＧ合成－（北西から）

2）調査区南端部全景（北から）

1） 1号甕棺墓（南から）

2） 1号甕棺墓（西から）

3） 1号甕棺墓埋納状況（北から）

1）15号甕棺墓（北から）

2）15号甕棺墓（西から）

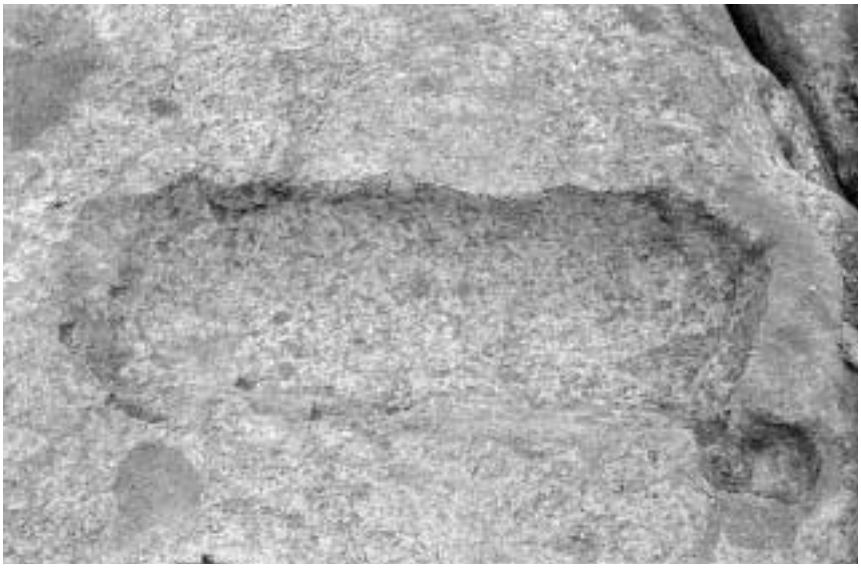
3）15号甕棺墓埋納状況（東から）

1） 5号木棺墓（南から）

2） 5号木棺墓（東から）

3） 5号木棺墓床断面（南東から）

1） 6 号土壙墓（南から）



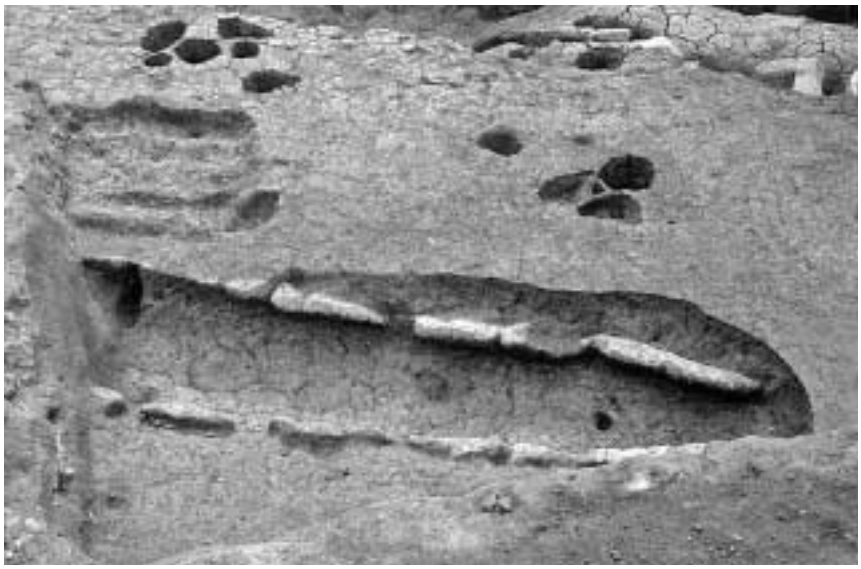
2）11号土壙墓（西から）

3）12号石蓋土壙墓・17号土壙墓（北から）

1）12号石蓋土壙墓（西から）

2）12号石蓋土壙墓（南から）

3）12号石蓋土壙墓開蓋状況（北から）



1）17号土壙墓（東から）

2）17号土壙墓断面（南から）

3） 2号土壙（西から）

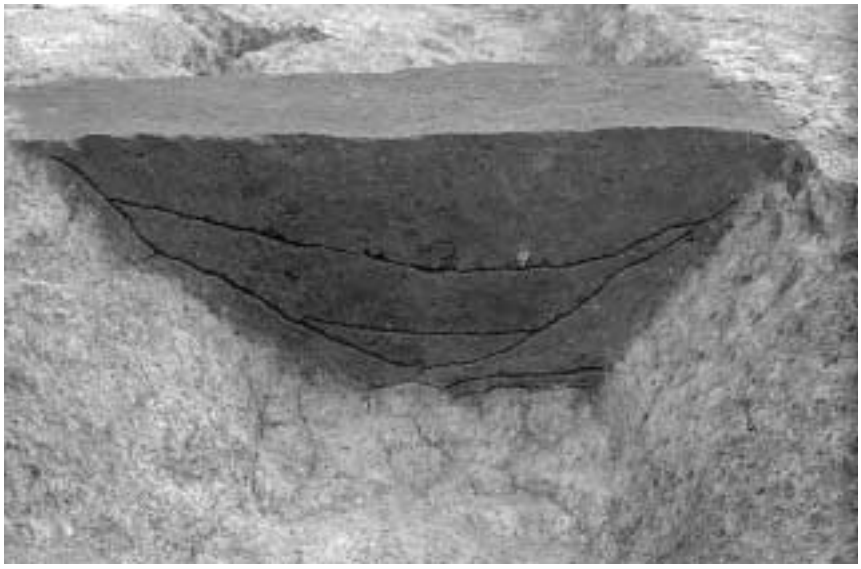
1） 3号土壙（北から）

2） 3号土壙断面（南から）

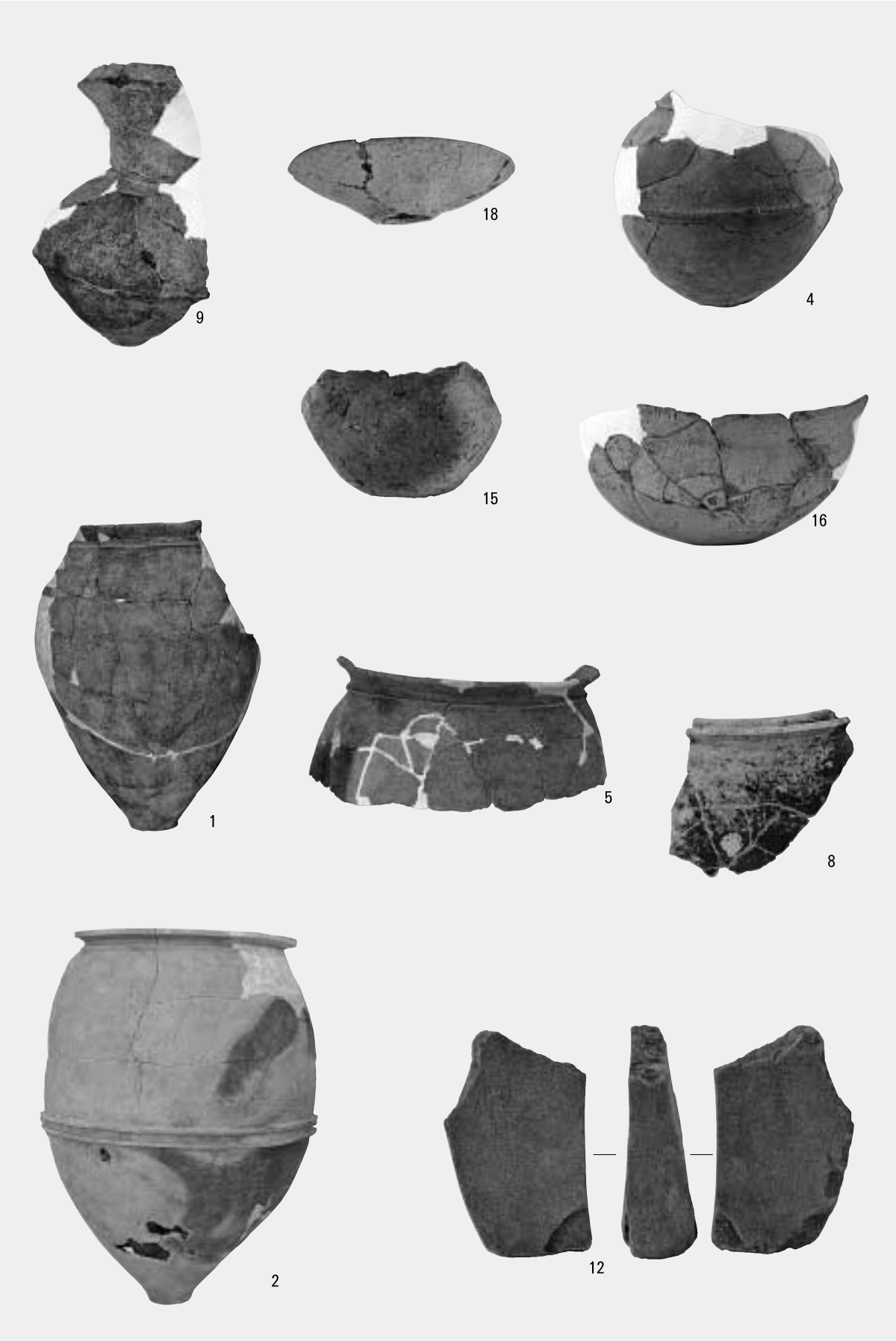
3）13号土壙（西から）

1）調査区西半部全景（北西から）

2） 9号溝・12号石蓋土壙墓（北西から）



3） 9号溝東西土層断面（北から）



出土遺物（縮尺不同）

報告書抄録

ふりがな	いじりＢいせき
書名	井尻Ｂ遺跡19
副書名	－井尻Ｂ遺跡第34次調査報告－
巻次	
シリーズ名	福岡市埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第1106集
編著者名	小林義彦
編集機関	福岡市教育委員会
所在地	〒810-8621　福岡市中央区天神１丁目８番１号
発行年月日	2011年３月18日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 （㎡）	調査原因
		市町村	遺跡番号					
井尻Ｂ遺跡（いじりいせき）	福岡市南区井尻4丁目815-1、822（ふくおかしみなみくいじり）	40130	90	33°32′35″	130°26′35″	20090916 ～ 201030	485	記録 保存

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
井尻Ｂ遺跡 第34次	集落・墓	弥生時代	甕棺墓　土壙墓 木棺墓　土壙 溝遺構	弥生土器、石製品	

井尻Ｂ遺跡　19

── 井尻Ｂ遺跡第３４次調査報告 ──
福岡市埋蔵文化財調査報告書第1106集

２０１１年（平成23年）３月18日

発行　福岡市教育委員会
福岡市中央区天神1-8-1

印刷　協文社印刷㈱
福岡市西区小戸4-24-5